大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第三十九卷　第五號

昭和九年十一月一日發行

論叢

資本利子稅に就きて……法學博士　神戸正雄

經濟理論に於ける勢力の地位……文學博士　高田保馬

時論

中小商工業の更生と組合運動……經濟學博士　谷口吉彥

研究

獨逸の本位制度……經濟學士　島本融

カルテル活動の分析……經濟學士　田杉競

ヴィクゼルの自然利子論……經濟學士　青山秀夫

說苑

大阪の刷子工業に於ける經營形態の發達……經濟學士　堀江保藏

配賦稅制度に於ける配分標準に就て……經濟學士　佐伯玄洞

商業に關するマルクス說の一批判者……經濟學士　松井清

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

商業に關するマルクス說の一批判者

松井清

一

商業經濟學上に於ける問題を中心として、マルクス學說に批判を加へた稀有のものとして、ブリ氏の論文『アダム・スミス以來の國民經濟學理論に於ける商業の地位』[1]がある。ブリ氏はスミス以來の經濟學諸體系に於て、商業が如何なる地位を占むるかを檢討したる後その最後の部分をマルクス商業理論の批判にあてゝゐる。マルクス經濟學が價値論を基礎とするその全體系に於て、英國正統學派の發展と見らるゝ如く、その商業に關する問題の提起もまた、全く正統學派流に、商業の生產性の問題を中心として展開されてゐる。しかも正統學派の經濟學が、彼れに於て一應の完成を見たると全く同樣の意味に於て、商業の生產性に關する問

1) Jos. Burri. "Die Stellung des Handels in der nationalökonomischen Theorie seit Adam Smith." (Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. 1913. viertes Heft. S. 574-646)

題もまた、彼によつて一の徹底した見解にまで發展せしめられて居るやうである。從つてマルクス商業理論の批判は、單なる理論上のそれ以上に、我々の興味をそゝるものがある。

さて一つの基礎構造たる價値論の上に有機體として作り上げられたマルクスの學的體系に於て、一の見解を問題とする場合には、常に他の部分との密接なる聯關の下になされることが必要であり、殊にその方法論的基礎が考察の中心に置かれねばならぬと思はれる。然るにブリ氏はかゝる基礎的部分を、與へられたものとして前提して居り、その批判の方法は全構造的聯關に於てマルクス學說を問題とすることをせず、むしろ謂はゆる內在的批判に重點を置いてゐるが如くである。以下その所說を簡單に紹介しやう。

二

ブリ氏は先づマルクスの商業不生產說と商業必然說との矛盾に、默示的な疑問を投げかけてゐる。

マルクスの資本循環の表式はブリ氏によつて次の如く示されて居る。$G-W\frac{A}{(pm)}\cdots P\cdots W'-G'$[2] 流通過程たるG－WおよびW′－G′は生產過程Pと嚴密に區別されねばならない。この二つの流通過程のうち後のW′－G′は單に生產過程に於て生產された價値の實現を行ふに過ぎないものであり、流通過程は價値生產的でなくして價値の形態變化、價値の轉形を行ふのみである。價値および餘剩價値は、生產過程以外の部面にあつては、絕對に形成され得ない。『價値變化は、たゞPなる轉形の下にのみ、生產過程の下にのみ生ずるのである。斯くして、生產過程なるものは、形式上だけの流通轉形に對立して資本の現實的轉形として現れることになる。』[3] 從つて流通過程に於て機能する商業に依つては、何らの價値も生產されることなく、マルクスが彼れの價値論に於て主張する如く、單に等價のみが交換される。

かく價値も餘剩價値も形成されないに拘らず、流通過程卽ち商品形態から、貨幣形態への商品價値の飛躍は、產業資本家にとつては異常に重要である。それは

2) Jos. Burri, a. a. O. S. 606. （この表式はマルクス自身のものとは多少異つてゐる。これはブリ氏の意識的に改變したものか、また如何なる理由から改變したものかは、明らかにされてゐない。）
3) Jos. Burri, a. a. O. S. 606.
(Karl Marx; Das Kapital BD. II. 邦譯、改造社版資本論第二卷27頁、)

マルクスによれば正に『命がけの飛躍』である。もし商業の行ふ處の商品形態から貨幣形態への價値形態の轉形機能が失敗すれば、商品は流通の流に於て停滯し、資本の再生產過程は中絕し、恐慌が襲來して、產業資本家の再生產過程は中絕されねばならない。

かくして商業は、一方には資本の再生產過程に必然的なものであるに拘らず、他方には不生產的なものであるとされて居る。この一見われ〳〵の眼に矛盾であるが如く映ずる點に關しては、ブリ氏はたゞ之を指摘するに止め、[4] 次いて彼の積極的批判の對象として、マルクスの流通費用についての分析を取りあげる。

流通過程に於てもまた生產過程に於けると同樣に、不變資本および可變資本を必要とし、之が爲めの費用として流通諸費用が支拂はれねばならない。かゝる費用は商品の價値に入り込まないであらうか。マルクスの流通不生產說に從へば、明らかに流通費用は商品の價値に入り込み得ない。マルクスは之を次の如くに說明して居る。『價値の狀態變化には時間と勞働力とを要する。けれどもこれは、價値を作り出すためではなく、一の形態から他の形態への價値轉形を行ふため必要なことである。而してかゝる狀態變化の際に、雙方とも過剩の價値量を占有しようと努めることは、問題の上に何等の變化も與へない。この勞働は、雙方の惡意的な企圖によつて更らに甚しくなるが、それは一の訴訟手續についてなされる勞働が係爭對象の價値量を增大することがないのと同樣に、價値を造り出すものではないのである。[5]』『價値狀態變化の機能が、資本家に依つて一定數の賃銀勞働者に移讓された場合に於ても、問題は何ら變化しない。『彼れの勞働の內容は、價値および生產物のいづれをも造り出すものではない。彼れ自身が生產上の空費の一部なのである。[6]』この場合に勞働者が彼の資本家に對して捧げる餘剩勞働時間は、不生產的資本を減少せしむる助けと成る限りに於て、資本家に利益を與へるに過ぎないのである。かくの如く說明さるゝ流通上の諸費用を、マルクスは純粹の流通費用 (Reine Zirkulationskosten) と呼び、賣買期間、簿

4) Jos. Burri: a. a. O. S. 606.
5) Jos. Burri: a. a. O. S. 607
(Karl Marx: Das Kapital BD. II. 邦譯、前揭書第二卷98頁)
6) Jos. Burri: a. a. O. S. 607
(Karl. Marx.: Das Kapital BD. II. 邦譯、前揭書第二卷100頁)

記、貨幣の出費が之に屬せしめられてゐる。謂はゆる商業上の費用これである。然るに現實に於ける流通現象は、單に純粹の流通費用のみを含むものとして現はれるものでなく、そこには本質上異る費用が、外見上流通費用であるかの如く現はれる。『此等の流通費用は、實をいふと流通部面に持續されるに過ぎざる、隨つて流通形態のため自己の生產的性質を隱蔽されるに過ぎざる、生產過程から生じ得るものである。』[7]かゝる費用の中に屬する保管上の諸費用および運輸上の諸費用は、少くともそれが社會的に必要なる限りに於て、假裝した處の生產費用であると云はねばならない。

右の如きマルクスによる流通費用の說明に對してブリ氏は純粹の流通上の諸費用と運輸上の諸費用との類似性もしくは同一性を論證して、『流通費用に關するマルクス理論構造の破れ口を見出した。』[8]となしてゐる。ブリ氏に從つて運輸上の諸費用についてのマルクス說を檢討しやう。『生產物の量は運輸によつて增大するものではない。また、運輸に依つて生產物の自然的性質が變化を受けるやうなことがあるとしても、それは若干の場合を除く外、何等豫期的の利用效果ではなく、寧ろ不可避的の惡なのである。』[9]此處に於ては物財の量が增加することもなく、その客觀的使用價値も變化しない。ブリ氏は、『マルクスの生產概念に從ふと、かゝる場合には、價値および餘剩價値の形成は不可能となる。』[10]となし、運輸業の生產性を論證せんとするマルクスの試みがその價値論に矛盾する點を突いて居る。更らにマルクスの云ふ處によれば、『然し乍ら、物財の使用價値は、物の消費に依つてのみ實現されるものであり、而して物の消費なるものは、位置の變化と、隨つて運輸業の追加的生產過程とを必要ならしめ得る。斯くして、運輸業に投ぜられた資本は、一部的には運輸機關からの價値移轉により、一部的にはまた、運輸勞働を通しての價値追加によつて、輸送される處の生產物に價値を附加する。』[11]運輸業は生產が行はれる一工場內に於て、棉花が梳刷室から紡績室に移轉される場合に、その運搬が生產過程に入れられるのと同樣なる意

7) Jos. Burri.: a. a. O. S. 607
(Karl Marx.: Das Kapital BD. II. 邦譯、前揭書第二卷105頁)
8) Jos. Burri,: a. a. O. S. 607
9) Jos. Burri, a. a. O. S. 608
(Karl Marx: Das Kapital BD. II. 邦譯、前揭書第二卷117頁)
10) Jos. Burri, a. a. O. S. 608

味に於て生産であり、たゞ運輸の場合には、完成生産物が完成商品として一の獨立した生産場所から空間的に隔つた他の生産場所に移轉され、前者の場合の現象が大規模に行はれるに過ぎないのである。

かくの如きマルクス説に對するブリ氏の批判は次の如くである。今もしマルクス説に從つて、商品の場處的移轉を行ふ勞働が生産的であるとすれば、何故に消費部面に於て使用價値を實現せしむるのに、場處的移轉と同樣に必要な商品の人格的移轉を行ふ勞働が、不生産的であるのか。生産物が消費部面に入つた時に於て、初めて生産が完成されるのであるならば、流通は生産部面から消費部面への運動であるから、之を擔當する所の流通勞働は、正に流通勞働には非ずして生産的勞働であると云はねばならない。マルクスが流通部面に共に機能する商業と運輸業について、一方を不生産的であると云ひ、他方を生産的であると云ふのは、明らかに矛盾ではないか。兩者は何れも、自ら市場に出でず、また自ら交換することの出來ぬ商品を、生産部面から消費部面へ移轉せしむる爲に、同樣に必要ではないか。かく論じ來つて、ブリ氏は次の如く斷定する。『マルクスが純粹の流通費用として不生産性を主張する賣買勞働、簿記および貨幣の費用は、運輸および保管上の諸費用と全くの類似性を持つ。』[12] 生産費用と流通費用を本質的に區別すべき規範は一般に存しない。然るにも拘らず、之を區別せんとすれば、救ひ難き、Kasuistik に陷らねばならないであらう。マルクスは商業の不生産性を論證せんが爲め、生産過程は商品の客觀的使用價値が作り出された時に、すでに濟し遂げられるものと云つて居るが、その生産概念を貫き通す事が出來ないのである。彼は之を保管業と運輸業の生産性の論證に於て破つて居る。其處に於ては何らの客觀的生産物も何らの商品も生産されないに拘らず、價値が生産されると說明されて居る。

三

以上に於けるブリ氏の批判は、資本がその再生産過程に於て通過する一段階たる流通過程の諸性質および

11) Jos. Burri, a. a. O. S. 608
(Karl Marx: Das Kapital BD. II. 邦譯、前揭書第二卷117頁)
12) Jos. Burri, a. a. O. S. 608

諸機能が專ら對象とされたのであるが、ブリ氏は更らに進んで、かゝる流通機能が一定の獨立せる資本家、卽ち產業資本家と對立せしめられた意味での商業資本家に依つて行はれる場合に於ける商業資本についてのマルクス說の檢討に入つて行く。問題は資本論の第二卷から第三卷の範圍に移る。

『社會の總資本について觀察すれば、その一部は不斷に相異るところの諸要素から成り、且つ絕えず大さを變じてゐるとはいへ、それでも常に商品として市場に存在し、貨幣に轉化せられんとして居る。また他の一部は、貨幣として市場に存在し、商品に轉化せられんとして居る。是等の資本部分は、絕えずこの推轉運動の中に、この形態上の轉化運動の中に在る。流通行程の內部にある資本の斯かる機能が、總じて特殊の一資本の特殊機能として獨立化され、分業に依つて或る特殊な種類の資本家たちに割り當てられた一機能として固定する限り、商品資本は商品取引資本または商業資本となる。』[13] 併し乍らかゝる流通資本の商業資本への獨立化は、事態の本質に何らの變化も與へない。その生產性は少しも異るところ無く、商業資本は依然として不生產的である。商人の賣買G－W－G′なる過程は、產業資本家の販賣機能W′－G′と本質上全く同一視すべきである。資本論第二卷に於てすでにマルクスは流通の不生產性を論證した。いま產業資本家によつて商品W′が商業資本家に販賣せられた場合に於ても、商品は單に位置を變じたのみで、依然として、商品資本であり、商業資本家の手中にあつて販賣せられるのを待つて居る。商業資本が、價値を生じないのは明らかである。ブリ氏は產業資本がその再生產過程の一段階に於て採る處の商品資本の概念から、商業資本の獨立化を導き出すマルクスの論理的過程には矛盾なしとして之に贊成してゐる。*

ブリ氏の批判の的となるのは、マルクスによる產業資本と商業資本の鋭い分離の仕方である。マルクスに依れば、近世經濟學はその最良の代表者に於てすら商業資本の特殊性を全く無視し、之を社會的分業によつ

13) Jos. Burri, a. a. O. S. 609
(Karl Marx: Das Kapital BD. III. 邦譯、前揭書第三卷229頁)
*) Jos. Burri, a. a. O. S. 610

て與へられた特殊の產業部門たる農業や製造業や運輸業と併立的關係に於て見て居るが、これほど脊理なことはあり得ないのであつて、商業は本質上諸產業と全く異るものである。之に對してブリ氏は正反對の立場に立つて次の如く云つて居る。『近世經濟學は、生產活動と流通活動、生產費用と流通費用、生產資本と流通資本の單一性を强調することが餘りにも少な過ぎはしないか。』[14]と。資本論第二卷に於けるマルクスの生產費用と流通費用の分離に反對したブリ氏は、同樣に資本論第三卷に於けるマルクスの產業資本と商業資本の分離に反對して居る。二者の見解の對立を商業利潤の問題について觀察しやう。

商業資本は價値も餘剩價値も生產しないけれども、年平均利潤は諸他の產業資本と同樣に生じなければならない。もし平均利潤を生ずることがないとすれば、資本は當然その部面から去り、商業資本はその存立の基礎を失ふからである。然らば商業上の利潤は如何にして生ずるか。マルクス說に從へば、商業資本自體によつては、價値も餘剩價値も形成されない。商品の客觀的なる使用價値は、商業機能によつては少しも變化せず、價値形成的な勞働は、其處に於ては實現せられないのであつて、商人の買ふ時と賣る時に於て、商品は同一の價値を持たねばならない。それにも拘らず、商人が一定の費用卽ち貨幣や簿記に必要な不變資本の費用、彼れの雇傭する勞働者の勞銀支拂の爲めに必要な可變資本の費用を要する事は、他の產業資本家と同樣である。この費用を彼れは何所から支拂ふのであるか。彼れはこの費用を商品價格の中に代置する事は出來ない。何故ならばもしさうすれば、彼れは商品をその價値以上に販賣することゝ成り、マルクスの等價交換說が破れるからである。マルクスはこの難點を如何にして切りぬけて居るか。それは平均利潤の槪念に依つてゞある。『商業資本なるものは、餘剩價値の生產に參加しないとは云へ、平均利潤への餘剩價値の均衡化には參加する。それ故に一般的利潤率といふ中には、餘剩價値の中から、商業資本に歸屬して行くところの

14) Jos. Burri, a. a. O. S. 610

部分、卽ち產業資本の利潤からの一の控除部分が、豫め既に含まれて居る譯である。[15]』マルクス經濟學に一般的な社會的平均の考へ方が此處にも働いて居る。現實の社會に見られる商人の販賣價格が購買價格に超過する現象は、商品の含む價値および餘剩價値のうち、商人の手に歸すべき部分が豫め控除されて居た爲に生じたのであつて、商品は價値以上に賣られたのではなく、實は價値以下に買はれたのであつた。之に依つて商業利潤が何處から支拂はれるかは解決された事に成る。しかしかゝる解決を主張した爲に、マルクスの等價交換說が破壞されはしないか、この點にプリ氏は深い疑念をさしはさんで居る。價値以上に販賣されることゝ同樣に、價値以下で購買されることも等價ではあり得ないからである。

價値不生產的な商業資本が商業上の利潤を生む爲めには、商業資本は一般的利潤率の構成に參加せねばならない。而してプリ氏の批判は商業資本は利潤率構成への參加の仕方に於て、產業資本と本質的に殆んど異

る所が無いと云ふ點を論證せんとしてゐる。批判はマルクスの引例に從つて行はれてゐる。[16]

一年間に前貸される產業資本の額を 720C＋180V＝900 とする。餘剩價値を 180m とすれば生產された商品資本の生產價格は 720C＋180V＋180m＝1080 と成り、平均利潤率は $\frac{180}{900}$＝20％と成る。次にこの 900 の產業資本の外に 100 の商業資本が介入し、同樣に自己の大さに比例して利潤の配當に與ると假定しやう。商業資本は價値を生產しないから、180m なる價値は二者の間に分割されて、162と18に成る。『商業資本はそれが總資本の上に、幾許の大さを占めるかに比例して、一般的利潤率の形成上に決定的に參加する』[17]からである。この場合、二〇パーセントだつた平均利潤は $\frac{162}{900}=\frac{18}{100}$＝18％となり、商業資本の介入によつて平均利潤率は低下したことゝなる。

產業資本家はこの場合に、何故にかくの如き利潤率の引下に甘んじなければならないのか、理由は次の如くである。もし商業資本家が存在せぬと假定すれば、

15) Vgl. Burri, a. a. O. S. 611
(Karl Max: Das Kapital BD. III. 邦譯、前揭書第三卷247頁)
16) Jos. Burri, a. a. O. S. 612.
17) Jos. Burri, a. a. O. S. 612.
(Karl Marx: Das Kapital BD. III 邦譯、前揭書第三卷246頁)

産業資本家は販賣機能を自ら擔當せねばならず、彼れが販賣機能を商人に移讓し、之に彼れの利潤の一部を分割した場合よりも、より多くの資本を流通部面に固定し、その結果として利潤率のより大なる低下を招くからである。『商業資本なるものは、直接には價値および餘剰價値のいづれをも造り出さない。それは流通期間を短縮せしめることに貢獻する限りに於いて、間接に産業資本家の生産した餘剰價値を增殖する助けと成り得る。それは市場の擴大を助け、諸資本間の分業を媒介し、以つて資本がより大きな規模で働くことを得せしめる限り、その機能によつて産業資本の生産性を促進する。』[18] ブリ氏の批判の中心は、次の點に集中される。即ち『積極的に餘剰價値を生産することゝ、餘剰價値の減少を防止することゝの間に大なる區別をなすことは困難である。』[19] マルクスは彼れが自ら樹立した産業資本と商業資本の鋭い區別を、他の部分に於いて破つて居るではないか。即ち價値の減少を防止する機能しか有せぬ保管上の諸事業を、彼は生産的な事業であると云つて居るのである。

四

ブリ氏の批判は大體右の如くである。マルクスに依つて鋭く分離された生産費用と流通費用、産業資本と商業資本の概念は、ブリ氏に於ては何ら本質的相違の存せぬものと解された。マルクス理論に於ける内部的な形式論理上の矛盾を指摘することに依つて、内在的批判を試みたブリ氏は、マルクスが商業の不生産性を論證する論理的過程の力弱い點を或る程度まで明確に突いて居ると云へやう。殊に純粋の流通費用(商業費用)と運輸業の費用の生産性に於ける相違についてのマルクス説の弱點は、彼に依つて徹底的に批判されて居り、この點はマルクス説のみならず、總ての商業不生産説が一般的に批判さるべき點であらう。然し乍らマルクス經濟學の基礎的な部分を與へられたものとして前提したブリ氏の批判は、その與へられたものとして前提された部分に關する解釋について、未だ論ずべき問題を殘してはゐないだらうか。

18) Jos. Burri: a. a. O. S. 612
(Karl Marx: Das Kapital BD. III. 邦譯、前掲書第三卷241頁)
19) Jos. Burri, a. a. O. S. 612

即ち、

（一）生產と商業との分離の概念を、歷史的、發展的考察から引離して、たゞ兩者の交錯せる資本主義的現實のみを考察の對象となすことにより、眞實に非ずとして否定し去るのは問題ではないか。

（二）資本主義生產方法に必然的なものとして說明された商業必然說が、果して商業不生產說と矛盾するかどうかは問題ではないか。

（三）社會的な抽象的な一の量としての價値概念を、素朴な物的客觀的價値概念と同一視するのは問題ではないか。

かくの如き諸問題は、直接に彼等の方法論上の對立にまで導かれねばならない。この點はブリ氏の積極的見解を見るに及んで益々明らかとなるであらう。しかし乍ら兩說を對立せしむることによつて一の結論を導き出すのは、私の今の意圖以外の問題である。茲ではたゞマルクス學說に關する一批判を紹介することによつて、商業不生產說の持つ諸性格を示し、且つ商業經濟學において最も缺乏して居る基礎的な理論的問題の存在する方向を攫まんとしたに過ぎない。